

第 17 回 生活単位

近畿大学 建築学部
准教授 山口 健太郎



【経歴】

京都大学大学院を卒業後、株式会社メトス、国立保健医療科学院協力研究員を経て 2008 年より近畿大学理工学部建築学科講師。2011 年 4 月より現職。

特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護などの研究を行うかたわら、高齢者施設の設計にも関わる。主な建物に「ケアタウンたちばな、設計監修、大牟田市」などがある。

高齢者施設において個室ユニットケアを推進してきた外山義先生は、その著書「自宅でない在宅」の中において、高齢者施設には3つの視点から見た単位（規模計画）が重要であると述べている（図1）。まず、最初に大切なのが入居者の視点から見た生活単位、ついで介護職員の視点から見た介護単位、そして、管理者の視点から見た管理単位となる。病院についても同様であるが医療機関は、共に過ごす場よりも個々の患者が治療に専念する場であり、滞在期間も短期間であることから、生活単位という要素は小さくなる（慢性期、療養型となると生活という視点が大きな要素となる）。

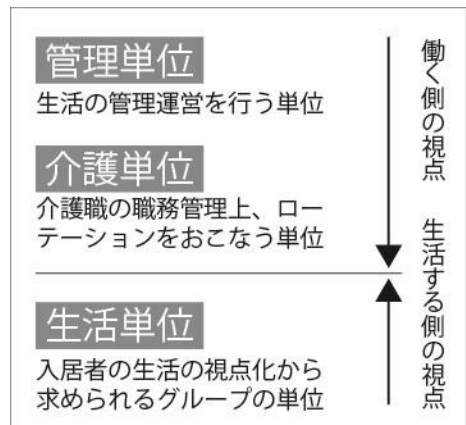


図1 生活単位の説明
自宅でない在宅より引用

まず本号では生活単位について考えてみたい。生活単位とは「共に生活を営む人々の人数」と定義できる。「生活」という言葉の定義がやや曖昧であるため整理すると、広辞苑における生活とは「①生存して活動すること。生きながらえること。②世の中で暮らしていくこと。また、そのてだて。」となるが、かなり広義の意味となるため、ここでは狭義の意味に絞り「基本的な日常生活行為（食事、入浴、排せつ、就寝など）を営むこと」を生活として位置づける。

その上で「生活単位」の定義について考えると、食事や入浴などの行為を共有する人々の集まりと考えることができ、この集まりに対応して空間（住居）が存在する。たとえば、戸建て住宅では、一緒に住んでいる人々の人数が生活単位となり、家族で住んでいる場合には家族の人数、一軒の家をシェアしている場合には同居人の人数が生活単位となる。高齢者施設においては、50人で大

.....

きな食堂や浴室を共有している場合には50人となり、10人で食堂、浴室等を共有している場合には10人が生活単位となる。

次に望ましい生活単位について考えてみる。望ましいとは「安定した人間関係を持続的に維持できる規模」としてとらえることができる。外山は前述の著書の中で科学的な裏づけがある理論はないと前置きしたうえで、望ましい生活単位を「入居者間の相互認識や馴染みを考えた上限と、死去や退去を考慮しても維持されるグループ内の継続性や、グループ内での小グループの成立性を考慮した下限値が経験的に割り出され、その間の幅として設定されたもの」と述べている。認知症高齢者について考えると、大規模な生活単位は精神的に不安定な状態に陥りやすいことから、名前は覚えられなくともなんとなく顔を覚えることができる「馴染みの関係性」を構築できる規模が重要とされている。また、高齢者施設では亡くなる人も多く、数人の入居者が短期間のうちに亡くなるとグループの雰囲気がガラッと変わってしまう。同居者が亡くなるという喪失体験に加えて、生活の雰囲気が急激に変わってしまうと高齢者に多大なストレスを与えることになるため、生活単位は集団の雰囲気を維持できる一定の規模が必要であるという側面もある。さらに、グループの規模が大きくなりすぎると、グループの中にいくつかの小グループができ一体感が失われやすくなるのに加えて、グループに入りきれず1人になってしまう人も出てくる。そのため、生活単位についてはグループの一体感や連帯感が生まれやすい規模に留意しなければならない。このような事を総合的に考えると生活単位の規模は10人±数人となるのではないだろうか。ユニットケアが定める10人に限定する必要はないと思われるが、おおむね10人程度が望ましいと考えられる。

また、高齢者施設では、50人規模の生活単位から10人規模の生活単位へと縮小してきたが、これに伴い空間の質も大きく変わってきている。50人が一斉に食事をするためには大規模な空間が必要となり、従来はホールのような食堂になることが多かった。それが10人程度となると空間の規模が小さくなり、より住宅的な雰囲気に近づけるようになってきている。さらに小規模化により居室と食堂等との距離も短くなることから、入居者自身による移動が容易となり、自発的な行為も増えてくる。

我々は学校や職場等においてある集団の単位に属していることが多い。だが、何人で一緒に住むか・生活するのかということを考える場面はほとんどない。生活単位は施設特有の概念であり、いまだ発展途中にある。ゆえに、個々の施設計画においては慎重に考えていかなければならない。

引用文献 外山義著、自宅でない在宅、医学書院、2003.7